



Title	複数の複層的な多様性の認知と対話的態度—多様性を いかすために重要となる要素とそのプロセス—
Author(s)	増田, 智香
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (増田智香)	
論文題名	複数の複層的な多様性の認知と対話的態度 —多様性をいかすために重要となる要素とそのプロセス—
論文内容の要旨	
<p>本研究の目的は、「多様性の高いグループがよい評価を得るための成功要因とそのプロセス」について明らかにすることである。</p> <p>現在、日本国内の組織でも多様なメンバーと協同する機会が増えつつあることなどから、ダイバーシティ経営が推奨されている。この研究では、社会の多様化・複雑化により、日本の組織においても早急な変革が迫られている現状を受け、日本組織の「多様性」に注目することとした。しかしながら、多くの先行研究が示すように、組織の多様性はうまく働けばよりよい効果をもたらすが、同時に悪影響を及ぼすリスクもはらむ。さらに、国内における多様性の実証研究の不足はこれまでも数多く指摘されており、特に、「グループの多様性をうまく活用し、成果や創造性につなげようと試みる際に、どのような要素やプロセスに着目することが重要であるか」を明らかにするような研究はほとんど報告されていない。</p> <p>従って本研究では、日本の企業と同質の活動を行う工学研究科の実践型教育におけるグループ活動を事例として取り上げ、2つのケースについて実証調査を行った。この際、日本においても多様性を広い意味合いで理解し、違いが存在する状況を目的化するのではなく経営戦略として議論される必要性がある傾向を受け、多様性を広義に、かつ複数の項目により調査した。多様性とは、個人の持つ属性のことで、人が有するほとんどの属性のことである。本研究では、多様性の項目として「表層的多様性」と「深層的多様性」という区分を用いることで、より正確な分析と考察を可能とした。なお、最終的に「多様な環境にあるグループ活動において多様性をうまくいかすために必要な視点、および多様性を捉えるための視点を提示すること」を目標として研究を進めた。</p> <p>調査では、まず前提として「多様性がグループ活動の評価に影響を与えるのか」を明らかにした。その結果、対象のケースにおいては、多様性がグループ活動の評価に相関があることが確認された。そのため、「多様性の高いグループがよい評価を得るための成功要因とそのプロセス」を明らかにすることを目的とし研究を進めた。その成果として、多様性をうまくいかすグループには共通点があり、鍵となる成功要因とプロセスがありそうということが明らかになった。具体的には、深層的多様性の項目の中では「スキル・能力」が多様であるほど評価がよい傾向、多様性を有するだけではなく「認知」することが大変重要であることが明らかとなった。さらに、活動プロセスの中では、多様性の次元を問わず、対話的な態度で、コンフリクトを受容することが重要であることが分かった。</p> <p>本研究の学術的新規性としては、「多様性をいかすための要素として対話に焦点を当てた点」と、「個々人の態度を起点に多様性との関連を調査した点」の2つが挙げられる。この結果として、対話的なコミュニケーションが行われる地盤として「心理的安全性」と、メンバーが互いに影響を与えあう「リーダーシップ行動」を意識することの重要性についても確認された。多様性を捉えるための視点としては、海外での多くの先行研究も示している通り、多様性を単一に捉えるのではなく、表層・深層とで分けて考える必要があることが確認された。これは、表層と深層では多様性としての性質が違うことから、それぞれが与える影響が大きく異なることが起因している。加えて、複数の深層的多様性が組み合わさって活動に影響を与えていることから、ある特定の項目のみに注目するのではなく、複層的に多様性を認知することが重要であることが、新たな学術的貢献として示された。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (増 田 智 香)			
論文審査担当者	(職)	氏 名	
	主 査	教授	上西 啓介
	副 査	教授	倉敷 哲生
	副 査	教授	藤田 清士

論文審査の結果の要旨

SDGs など世界では多様性の重要性が強く認識されている。一方、日本の取り組みは世界と比較して遅れていると指摘されることも多いが、組織の早急な変革が試みられており、更に企業経営においてもダイバーシティ経営が広く認知され、それに取り組む企業も増えている。もともと多様性は創造力など多くの新しい効果を期待させるものではあるが、必ずしも良いことばかりではなく、むしろ悪影響を及ぼす可能性も否定できず、そのマネジメントが重要である。しかしながら、効果や成果といった観点からの多様性やそのマネジメントプロセスに関する研究や実証研究事例は少ない。本研究では、組織の多様性を成果や創造性につなげるため要素やプロセスを考察するために、工学研究科で実施しているプロジェクトラーニング (PBL) 科目「ビジネスエンジニアリング研究」でのグループ活動を事例として取り上げ、実証調査を行ったものである。特に多様性を男女や国籍などの「表層的多様性」としてだけでなく、学歴や専門性などの「深層的多様性」の観点からの区分も用いたこと、またプロセスとして人材間の「対話」や「態度」に着目したことが本研究の特徴である。以下にその成果を要約する。

- (1) 題材として取り上げたビジネスエンジニアリング研究は、受講者が表層のだけでなく、深層的な多様性のある学生が受講しており、それら受講生をグループ活動のために 4、5 人の少人数に分けても、各グループは多様性に富む構成となっていた。このメンバーの多様性が異なる複数のチームで取り組んだプロジェクトのプロセスと成果を比較した結果、表層のだけでなく深層的な多様性のあるチームの成果ほど、プロセスと成果ともに高い評価を得る傾向を示した。
- (2) 高い評価を受けたグループの共通点を調査することにより、プロジェクトの成功要因について考察した結果、深層的多様性の項目の中では特に「スキル・能力」の多様性が高い評価につながる傾向が確認された。また活動プロセスに着目した結果、多様性が存在すること以上に、各々のメンバーの多様性を「認知」することが重要であること、更にはそれを行動に反映させた「対話的態度」も重要で、具体的には対話的なコミュニケーションが行われる地盤としての「心理的安全性」とメンバーが互いに影響を与えあう「リーダーシップ行動」を意識することが重要であることを論じた。

以上のように本論文は、多様性を表層のだけでなく深層的な側面からも捉えた点、およびグループ活動における対話と態度に焦点を当てることにより、多様性をいかすための要素について論じた先進的な成果を多数含む論文である。本論文により示されたこれらの知見は、早急な変革が迫られている日本の組織においても実践的な方向性を示唆する価値を有しており、よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。